逸話や面白話

記念誌編集委員会

会員の方々にはいろいろなエピソードをお持ちの方がおられます。「日曜囲碁対局の録画を何度見ても強くならない」という述懐とか、「いくら考えても妙手は浮かばなかった」という下手の笑い話があります。「大会の朝、うどんなど軽いものを食べて出ると勝率が上がる」という摩訶不思議な話をきいたこともあります。ともあれ、囲碁は笑いやペーソスを生む人生ゲームでもあります。どうかしばらくお付き合いください。

■記憶が老化する前に　　恩方囲碁同好会　竹内朝晴

八碁連の競技委員長を離れ、早いもので５年が経過しました、お陰様で八碁連 11 支部を全部訪問させていただきました。今思えば理事を担当させていただき予想していた以上に楽しかったなと感謝している次第です。各支部にはそれぞれの特長があり、新たなる出会いがあり、思いがけない体験をさせていただきました。私の記憶が老化する前に当時のエピソードを紐解いてみたいと思います。

第１話

私と八碁連の出会いは意外なところからでした。担当理事の H さんが入院されたのでピンチヒッターでお手伝いに参加することになりました。当時の会長 信江峻、副会長 南正一郎、編集部 山縣文雄、会計 松崎邦夫、競技委員長 安西実の各氏で私は安西理事のお手伝いでした。

第２話

競技委員長のデビューは忘れることができない事態になりました。大会に出場したい私は競技ルール等をろくに説明もせず大会に参加したのです。目が飛びでる程叱られた記憶があります。三段をやっと卒業し囲碁が面白くなってきた頃のほろ苦い思い出です。

第３話

級位認定大会のことでした。A さんと B さんの対局が終わらないので判定をつけてほしいとの事でした。私には判断ができず審判長にお願いをしましたがやはりあと 15 手程打たないと分からないとの事でした。時として有段者より級位者のほうむつかしい碁を打たれるものだ、ということを学ぶ経験をさせていただきました。級位者には囲碁を始めた方が多く、誤解を招く判定をして囲碁の魅力が冷めては困る、純粋な方々だからこそ余計な気を遣うのは当然だと思うのです。

第４話

ある同好会の大会で K 七段対 T 五段の一回戦でした。K 七段の手が挙がり T 五段の持ち時間が切れたとの事でした。早速内容を確認しましたらなんと K 七段、大石を取られていました。

「確かに時間は切れた方が敗けですが、この内容では投了が先でしょう」いや「時間が切れた方が敗け」と暫く押し問答は続きます。

T 八段の判断で時間は切れた方の敗け、の一言で勝負は決まりました。「分かりました、勝負は貴方の勝ちですが七段がこの内容で納得出来ますか？私は高段者として恥ずかしいと思います」この反撃は K 七段にはとても響いたかもしれません。同好会の大会を二人共キャンセルして、時計なしで勝負を着けると申し出たのです。結果は T 五段の二連勝でした。二人共何故かニコニコして爽やかです。K 七段と私のみ気まずい雰囲気だけが残りました。

因みに恩方の高段者は、この様な勝ち方をしたら投了の潔さを知らないと一喝するでしょう。私はそのように指導を受けました。しかし翌年の新年に「正月や八碁連に熱き心有り」K という賀状をいただきました。本当に驚きました。以来 K さん T さん共に私は囲碁を楽しんでいます。再確認ですが時間は切れた方の敗けです。

第５話

三段と五段の対局です。何故か三段が白を持ち五段が黒を持っています。30 分以上経過して白番の方が気がついたとのことです。競技ルールの説明のとき互先 6 目半コミと説明があったので、てっきり互先だと思い自分の方に白石があたったので握ってしまつた、今から打ち直してもいいですか？との事でした。

「両者負けから打ち直しは認めますが、これは大会ですのでこのまま継続してください」とお願いしました。結果は 10 目以内の勝負でしたが五段の勝利でした。この様な間違いに私は二度遭遇しました。緊張する大会では考えられない勘違いが出るものです。

■私の囲碁歴　　大和田囲碁同好会　井出道明

10 年前の「20 年史」誌を再び目を通し、歴代の会長、役員のお名前を懐かしく拝見した次第です。一方、現在の当会の名簿では 30 数名ですが、10 年前の当時からの方は小生を含め 10 名程度、その中で常時例会に来られる方は６名くらいで、時の流れをつくづく感じます。

小生の囲碁歴は約 60 年にもなるのですが、進歩の程は全くの牛歩です。杉並区在住当時、私は大学生で、父はほとんど日曜毎に叔父達とよく碁盤を並べて楽しんでいたのを思い出します。私も少しの時間、覗き込む程度で、余り興味を持たなかったのですが、弟は生来、勝負事が好きなようで、熱心に見学したり打ったりでした。今では小生のほうが２，３目置く身分です。

実際に打ち始めたのは入社後囲碁部に入ってからです。それも当時運動部に入部し、バレーボールをやっていたので、囲碁を打つのは雨天の昼休みと、終業後の夕方しかありませんでした。しかし、四段くらいの先輩が終業後に週１，２回指導してくれて、少し上達した気分になりました。更に終了後は神田の飲食街に出掛け二人で歓談したのも懐かしい思い出でした。

さて、八碁連に入ってからは数年前迄は研修部に入り、毎週土曜日に受講して他の同好会員と打ち合い、勉強になったと記憶しています。また、今はなくなりましたが、団体対抗戦なるものがあり、予め決められた他の同好会との６人ずつ A、B クラス別に相手を変えて３局ずつ打って、合計勝ち数(合計 18 局)でチームの勝敗を決めるのも楽しかったです。９対９の場合は引き分けといった塩梅です。

その他、余り回数は多くはなかったですが、初心者教室の子ども教室などにも参加しましたが、教えることは自分自身の勉強になることも実感しました。これからも身体の許す限り足を運んで楽しみたいと思っております。

■八王子との不思議な出会い　　大和田囲碁同好会　成田　滋

私の父は長年樺太鉄道で働きました。昭和 20 年 8 月 23 日、侵攻してきたソ連軍に抑留されます。捕虜収容所での労役に従事し、同 23 年に帰国します。その後、国鉄の美幌、名寄、稚内、旭川、深川駅の助役や駅長をして、昭和 42 年に退職します。退職後は札幌に居を構え、それから長男夫婦が民宿を経営する下田に移り、その後八王子の館町が終の棲家となります。

ところで平成 30 年の 4 月に、年度の八碁連名簿を作るようにと吉澤實会長より依頼されました。各同好会からの名簿を調べていると、恩方同好会員の浅川武二三氏のご住所が両親の家の番地の隣であることに気がつきました。そのことをお話しすると、浅川氏は、生前父とお会いしていたというのです。そのきっかけは、二人とも国鉄に勤めていたからです。

図１　樺太と北海道

昭和 30 年代は国鉄の全盛期です。ところが八割以上の路線が赤字となった国鉄は、存亡の危機に直面します。父は長年、組合との交渉で苦しんだと述懐していました。恐らく二人は労使交渉に巻き込まれたはずです。退職した身で、その頃の激動期を懐かしく思い起こしたろうと察します。

両親が亡くなり父の財産を親族で分けたとき、私が貰ったのは今も使っている勉強机と椅子、弓矢一式、そして厚さ 4 寸の碁盤と本蛤の石です。父は多趣味でして尺八は都山流の師範、弓道は全日本弓道連盟の五段の免状を持っていました。読書のムシでもありました。囲碁は嗜む位だったようです。浅川氏が念願の四段になったときは、父とのご交誼のお礼を兼ね、父の形見の品をお祝いとして贈呈するつもりです。

もう一つの八王子との出会いです。私の母は大正３年、樺太の豊原生まれです。家は林業を営んでおりました。昭和６年、高等女学校の修学旅行で大正天皇、皇后の多摩陵を参拝します。樺太から稚内、それから札幌を経由して函館

へ、青函連絡船で青森へ、さらに上野、そして中央線で八王子に到着です。片道、丸二日の行程です。

母達が降りたところは、かつて東浅川仮停車場と呼ばれ皇室専用の駅でした。御陵を参拝する修学旅行生を乗せた列車は、特別に駐停車するのを許された時代です。現在の東浅川保健福祉センターの第二駐車場のあたりです。

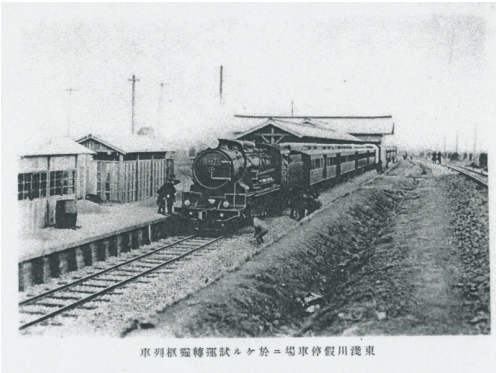


写真１　大正天皇大喪記録（鉄道省）

昭和 55 年に母は八王子に住むと、何十年か振りにこの停車場跡を訪ね、多摩陵にも行きます。停車場跡のあたりは面影がなく、御陵だけを思い出したといっていました。八王子での母の余生は、女学校時代の修学旅行が導いたようです。今私も不思議なご縁と「見えざる手」によって八碁連に導かれております。

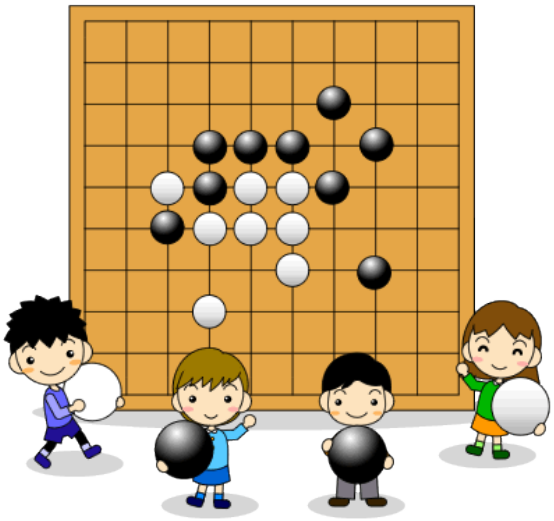
■両者負けの対局と無争学園　　川口囲碁同好会　廣島松治

「囲碁指導者」とは憚りながら言える身分でもないので、控えめに「囲碁案内人」と称しております。「囲碁案内人」という名称は川口囲碁同好会元会長山本良宣氏の提言によるもので、始めて囲碁に接する人々に囲碁を理解してもらう手助けをする者ですから、相応しい名称だと思います。

長い「囲碁案内人」としての活動から思い出されるエピソードを紹介することにします。一度、子どもから「先生は間違って教えた」と指摘されたことがあります。適当なことを言ってしまったのが原因です。子どもは記憶が確かです。このような時は、「きみはすごいね、」「大人も間違えることがあるんや、」といって子どもの自尊心を受けとめることが大事です。

こんなこともありました。ある大会で黒を持って打っていた人が、アゲハマの白石をうっかり打ってしまいました。これは反則でしょうか、そうでないでしょうか。実は反則なのです。これによって勝敗が決まるのが囲碁のルールの非情さ、厳しさというものです。

ある時、「負けました」と宣告した後、碁笥の蓋に取った石があったのに気づきました。それを出せば勝っていたのです。今さらそれを出すわけにはいきません。宣告後に、石を出して「失礼しました、ごめんなさい」といえるでしょうか。



倉内満先生からいろいろなことを教えてもらいました。子ども囲碁教室での囲碁のマナーはかくあるべし、という姿勢を垣間見たときです。先生は黒板にマナーを貼り出し、初めに子ども全員に朗読させるのです。(１)ふざけない(２)大きな声を出さない(３)先生の話はよく聞く(４)お願いします(５)ありがとうございました、といった基本的な礼儀作法です。

囲碁教室で各人の対局表を作成します初心者は 29 級からスタート。その他の子は適宜級位を付けます。勝つと 10 点、負けても５点。100 点になると昇級させるのです。「負けても５点」というのがみそです。子どもの囲碁への前向きな姿勢を評価してやるのです。子どもも大人も負けたときは、心底から「ありがとうございました」と言えるようになりたいものです。対局者の中には、勝つと拍手してくれる人がいます。本来なら負けたら悔しいはずなので、こちらを誉めてくれるのです。これも囲碁のマナーといえましょう。

最後に後味の悪かったエピソードです。終局間際、いわゆるダメ詰めしていたときです。そのとき、アタリになる箇所がでてきました。「アタリですよ」と指摘してくれない、黙ってひと塊の石を打ち上げられてしまったのです。相手は白を持つ上手の人でした。アタリを気がつかなかった私が悪いのでしょうが、文句はいえないとしても、お互い時計を止めて終わったと了解しあったのですから、私は審判長に説明しました。ですが審判長の裁定で両者負けというオチがつきました。実に不愉快この上ない対局でした。

話題は変わって、「無争学園」に学んだ経験のことです。昭和 21 年、西押立村、現在の滋賀県愛知郡の三角野（みすまの）に私立無争学園が設立され、私はその中等部に在学生 39 名の一人として入学しました。昭和 23 年、学制改革により無争学園は廃校になってしまいます。

無争学園は全員寄宿制で、遠くは兵庫県、甲賀市信楽町、彦根市出身の生徒もいました。生徒は土・日曜は帰宅できました。２年目からは当時としては寄宿生活の運営が困難なこともあってか、通学可能な者は自宅から通学することとなり、私もその一人でした。

学園の建物はすべてバラック建てで、寄宿舎は勿論のこと教室兼炊事場付き食堂・教員室・図書室・馬舎・牛舎・製粉所・製材所・物置等々が建っていました。無争学園での２年間は、数丁歩に及ぶ農耕地で小学校高学年が芋作りなど農作業を行う毎日でした。馬・牛・豚などの家畜の世話やサツマイモ作りなどの農作業等も体験しました。「為すことによって学ぶ」「Learning by Doing」が無争学園の教育目標でした。

写真２　かつての愛東町の神社

教授陣は東京大学・京都大学・九州大学出身者で占め学園長はアメリアのエール大学出身であり錚々たるメンバーが揃っていました。その学園長が戦争中は「必勝塾」と称し、数丁歩の農耕地で生徒に芋作りなどをさせていました。戦後は「必勝塾」から「無争学園」と名を改め開校したのです。その無争学園の名称については学園長が命名したのですが、その謂れは不明です。その学園長が当時の GHQ から戦争犯罪人として逮捕されます。教授陣、生徒らが学園長の釈放運動に立ち上がり、その甲斐もあってか無事復帰され、安堵したことを覚えています。

「為すことによって学ぶ」という２年間の労作教育の体験は、その後の私の人生の良き指針となっています。「何でも新しいことに挑戦する」ということに繋がっているようで、無争学園に学んだことを誇りに思っています。蛇足ながら、無争学園時代、私は乗馬が得意でした。当時、三頭の馬を飼っていて、名前は如風（にょふ）・荒鷲（あらわし）・紫月（しげつ）でした。そのうち

特に如風は、栗毛であまりスマートではなかったのですが、非常に可愛がりました。鞍などつけず裸馬に乗り、サーカスまがいに馬の背中に立つこともでき、皆を驚かせたことが今でも忘れることができません。

無争学園、高校の卒業後，早稲田式速記専門学校入学し、検定試験 1 級に合格しました。速記を「武器」に八王子市役所に就職しました。大卒者とも互角に仕事ができたと自負しております。ですがご存知のとおり、速記は今や無用の長物になっているようです。しゃべると文字が出てくる時代ですから、私などはちょうど速記が必要な時代に生きられたので、幸運だったと思っています。